

日本における伝統的ナショナリズムは可能か

——丸山真男と津田左右吉——（下）

荻 原 隆

目 次

- 一 伝統的ナショナリズムの条件
- 二 丸山真男の日本精神史評価（以上前号）
- 三 津田左右吉の日本精神史評価（以下本号）
- 四 伝統的ナショナリズムはどのような形を取るか
- 五 結語—自然と作為，内発と外来，そして自大と自虐の和解—

三 津田左右吉の日本精神史評価

我々日本人はみずからの伝統について分かっているようで、実はよく知らないのではないか、錯覚をしているのではないかと、間違った思い込みや評価をしているのではないかと。いや、そもそも日本精神の何たるかを総合的実証的に調べたことすらないのではないかと。だから、日本文化のある部分や特定の時代精神を取り出して日本の本質はこうであるというような勝手な議論が横行するのではないかと。たとえば、ある人は国体思想、別の人は武士道、あるいは儒教、仏教というような……。これらは本当に日本人の本質なのか。日本人の精神といえども長い時間の流れの中でたえず変化し発展してきたものであるから、古代から近代に至るまで、主要な文献を網羅し、吟味検証したあとでなければ、日本人はこうだというような評価を下せないのではないかと。そういう研究はこれまでありそうで、なかったのではないかと。こう考えた歴史学者がひとりいる。

たとえば、武士道はそんなに高く評価できるのか。我々はいつも国体主義を奉じていたのだろうか。天皇への忠誠心も時代とともにかなり変化しているのではないかと。儒教や仏教は本当に我々の生活に根ざした伝統なのか。アジアはひとつと言うが本当か。中国（シナ）とインド、そして日本の風土歴史や国民の精神は大きく異なる。中国史とインド史は相互に関係がきわめて弱い。それはヨーロッパ各国史が緊密に関係しているのとはまったくちがう。中国はインドに何の影響も与えず、インドもまたわずかに仏教を除けば中国に何の影響も及ぼさなかったではないか。西洋文明というものは確かに存在する。そこにはアーリア人種、キリスト教、ギリシャ・ローマの合理精神、アルファベットの言語などの明確な文化的紐帯が存在する。しかし、その意味における東洋文明というものは存在しない。

日本と中国の関係においてすらそうである。日本は古代において中国文明の影響を強く受けたが、やがてその影響を脱して独自の文明を形成していったのではないかと。だから、国家体制を見

ても、なるほど律令制は中国の中央集権制のいちおうの模倣であるが、やがて、摂関制に、そして武士の時代における幕府制、近代における西欧を範とした立憲君主制へと発展変化していったではないか。摂関制になお律令制の名残があるととしてもすでに日本の変容が加えられており、幕府制にいたってはまったく日本独自の政治体制で中国にはなく、近代立憲制は西洋をモデルとし、もちろん中国とは何の関係もない。日本人は古来天皇を敬愛してきたが、広大な国土には砂礫のように人々が散らばる中国では、民衆は帝王に対しなんら親近感を持たないし持ちようがない。中国の歴史は農民反乱と帝王独裁の単調な繰り返しで、日本のような貴族の時代・武士の時代・平民の時代というような区分もないから、歴史が長いのではなく、ただ時間が長いだけである。

同じように言語や気質、文芸の有無、家族のあり方や葬祭の礼についての意識などが日中ではまるで違う。たとえば、中国語には日本語のように語と語の関係を明らかにする助詞のようなものもないし、品詞の区別もない。この点で日本語のほうが中国語よりずっと論理的である。王朝文学や町人文学のようなすぐれた文芸もまた日本人のおおいに誇りとすべきものであって、中国にはない。道徳に目を転ずれば、中国の家族関係において尊重されるのは父系であり、異姓の養子は認めないが、日本人は母方にも親しみをもち、異姓養子はいくらでもあり、また、親に孝というだけでなく、子をいつくしむことを美徳と考える。葬祭に代表されるわずらわしい中国式の礼というものもない。庶民を禽獣視する中国とは違って、日本には義理とか一分のような町人独自の道徳が立派に存在した。気質を見ても、中国人は残酷で執念深く徹底した快楽主義者・物質主義者であるが、日本人は淡泊で素直である。日本とインドはさらに違う。

これまでの研究は、安易に日本をあいまいな東洋文明によってひとくくりにしたり、ある部分的なあるいはある時代の文化や傾向を取り出してこれが日本の伝統であるというような主張が多すぎたのではないか。日本人はかなり長い歴史を持つから、伝統の本質を語ろうとするならば、古代から近代に至る日本人の精神の変遷を詳細に調べることがまず必要ではないか。その上で日本人を論ずるべきではないのか。

ほぼこのように考えて、おそらくは進歩主義者というよりはむしろ保守主義者の伝統に対する思い込みや錯覚を正すために日本の伝統の本質を明らかにしようとした歴史学者・思想者がおそらくはただひとりいる（ただひとりしかいないというところに、日本の保守主義の貧しさがあるのだが）。

私はそれが津田左右吉であると考えている。丸山や植手氏は西洋のあとを最初は模倣でもよいから追いかけ、やがてはそれを乗り越えていこうという近代主義者であった。津田にももちろんそういうところがおおいにある。彼は中国文明を手厳しく批判したのとは違って、西洋文明を高く評価していた。中国文明は日本の国民生活の内部から求められたものではなく、時の王朝貴族が外形的に模倣したものに過ぎないが、西洋文明はよし政府が最初は主導したところがあったにせよ、国民がその進歩向上を背景に生活上の切実な必要から受け入れたものであると言っていることからその点はよく分かる¹⁾。しかし、あえて形容すると一彼は概念の放恣な使い方や、何々主義というような安易なレッテル張りをひどく嫌っていたが―津田は基本的には伝統的ナショナリストなのである。この点で西洋文明を受容しつつ乗り越えていこうとする「近代主義者」

丸山や植手氏とは決定的に異なる。

しかし、津田が多くの伝統的ナショナリストと格段に違うところは日本の伝統の中心を国体思想や武士道、あるいは儒教道徳だの仏教思想だのという誤った先入観で解釈しなかったところにある。まことに皮肉な現象ではあるが、日本の保守主義の陣営に伝統の本質がよく分かっている人はほとんどいない。津田はたんねんに文献を検討し、緻密な考証と見事な論理構成によって日本の伝統の本質に深い理解を持つに至ったほとんど最初のまた例外的な保守主義者であった。彼は難解な概念の使用を極力控えてはいるが、その立論の仕方はきわめて論証的で論理的である。ふりかえってみれば、昔から概して保守主義者には論理や実証を無視し、主観的・情緒的な発想をとる人が多かった。一方、これに対抗する当時の社会主義者も独善的な概念の図式を振り回し、結局、実証的でも論理的でもなかったことは今日明らかで、保守・左翼ともに本当の論証や論理を無視している点では同じなのである。津田はマルクス主義嫌い・概念嫌いで、空中楼阁的な概念や図式の行使を一切排除したが、しかし、徹底した実証と論理によって研究や主義主張を展開し、その点においてめずらしい保守主義者、むしろめずらしい日本人であった。彼が描き出した伝統の中心とはなにか、日本人の精神の本質とはなにか。もちろん、中心と言い本質と言い、それはけしてなにか「凝固」した「固定」したのではなく、常に変化していくものであることは津田自身がはっきりと断っているが²⁾、とはいえ、ある種の原型のようなものがおのずから浮かびあがってきているように見える。それを『神代史の新しい研究』（大正二年）・『古事記及び日本書紀の新研究』（大正八年）以下一連のすぐれた古代史研究、とくに名著『文学に現はれたる我が国民思想の研究』四卷（大正五～一〇年）³⁾に見てみよう。

日本人の意志の弱さ 津田は丸山に先行してやはり意志性の弱さを日本人の大きな欠点と考えていた。たとえば、上代人は温和な生活を送っていたが、強い意志が見られない⁴⁾。切実な人生の苦痛を味わぬ者は人生を高く、深く、大きくしようという情熱や努力が弱い⁵⁾。あるいは、『源氏物語』は人間の内面生活を見事に描き出しているが、この世の無常をただ嘆き悲しみ、罪業に苦しみ、宿命に翻弄されるだけの登場人物たちはいかにもいくじ（意気）がない⁶⁾。江戸期の町人文学には王朝のそれとは違う恋の激しさがあるが、義理と人情の板挟みとなって死んでいく心中物の主人公などを見るとやはりなんともめめしいではないか。ここに欠けているのは、世の不合理的に対して敢然と立ち上がり、かなわぬまでも激しく戦い、そうして破滅していくような勇壮で悲壮な物語であると言っている⁷⁾。こういう叙事詩的な、意志的な性格が日本人には弱い、津田はこう考えていた。なお、戦後版の『文学に現れたる国民思想の研究』四卷では、古代日本人の性格について「意志」の代わりに「欲求」という言葉を使っており、強い欲求がないと言っている⁸⁾。これは霊肉未分化の古代人に、理性によってコントロールされた欲求という意味での「意志」という言葉を使うのはどうかと思って、「欲求」に変えたのであろう。

日本人の平和性 日本人を意志の弱い民族と言う津田の考え方は丸山の一連の研究に大きな影響を与えたと思われる。しかし、津田は日本人の意志の弱さを戒め、また、個々の作品にもほとんど例外なく手厳しい批判を下しながらも、日本の伝統に全体としては良い評価を与えている。桑原武夫は『文学に現はれたる我が国民思想の研究』四卷を評して否定的言辞に満ちていると皮

肉っているが⁹⁾、この指摘はやや表層的なのである。津田が個々の作品についてきわめて鋭い、時に歴史状況を無視しているのではないかと思われるほどの仮借ない批判をしていることはそのとおりだが¹⁰⁾、彼は日本の民族的伝統を全体としては高く評価し深い愛情を持っていた。

それは一体どこか。津田は政治制度・道徳・文芸の各方面にわたって日本人の長所をいろいろあげているが、もっとも愛惜しているのは文化の各方面にわたって通底しているそのやさしさ、おだやかさ、平和性、素直さ、純朴性であろう。彼は文芸を日本文化の一大特色として挙げており、日本は特に抒情詩・文学にすぐれた作品を持つが、これも平和性のなせる技と考えることができる。治乱興亡が激しければ逆に歴史記録とか叙事詩が発達するはずである。つまり、丸山ならば日本人は意志が弱いと斬って捨てるところを、津田は意志は弱いが、おだやかでやさしいと拾い上げたのである。ここに両者の伝統に対する決定的な違いがある。

津田は日本人のこういう気質の起源・理由を二つないし三つ考えていた¹¹⁾。多少の解釈を交えつつ、まとめると以下になる。①ひとつは日本の気候がまことにおだやか、温和であること。日本は中緯度に位置し、かつ島国で海洋性の気候を持ったために、その気候は多くの諸国に比べ、酷熱でも酷寒でもなく、砂漠もなければ荒野も知らず、寒暖の差はそれほどない。多少湿気は多く、梅雨もあるが、熱帯の雨季のように何か月も連日非常に激しいスコールに見舞われるシーズンというものはなく、逆にカラカラに乾き酷暑が続く乾季もなく、かなり暮らしやすい。とくに、文化が早く開けた西日本は、気候は温和で、自然もすべてが小さくなだらかでやさしい。こういう風土のもとでは、適当な耕作によって相応の収穫が可能であり、人口の少なかった時代では生存競争もあまり激しくなかった。不毛な砂漠や荒涼たるツンドラでもなく、圧倒的に豊穡でかつ苛烈もしくは破壊的な熱帯雨林（たとえばインドの自然はきわめて豊かであるが、その暑さは耐えがたく、そして、モンスーンはすべてを押し流す）とも違って、比較的暮らしやすいマイルドな気候が日本人のおだやかさのひとつの根源をなす。

②もうひとつは民族の興亡を経験しなかったということである。日本人はすでに縄文時代から異民族に脅かされることなく、平和な生活を送ってきた。そして、二千数百年前から大陸より渡来した弥生人との接触混交がしばらく続き¹²⁾、ここに我々日本人の直接の祖先が生まれたわけであるが、その後、我々は本格的な異民族との接触を経験せずにはほぼ単一民族として生きてきた。同一民族であることが大きな原因となって、大和朝廷による諸豪族の統一は比較的平和裡に行われた¹³⁾。諸外国の建国のプロセスはしばしば他民族に対する戦争や征服を伴い、まことに血塗られたものになるが、そういうことはなかったのである。皇室が武力を以って民衆に臨んだことはなく、同時に何人も皇室に対し武力による反抗を企てたことはない。宮城に城郭がなく、帝王の威力を示す広大な宮殿や大土木事業がないのはその証拠である¹⁴⁾。古代が日本ほど平和であった国は世界でも稀有である¹⁵⁾。埴輪の平和的な表情を見よ¹⁶⁾。そして、日本人はほぼ単一民族として現代まで生活してきており、近代に至るまでは他民族との交流、緊張対立、戦争をたいして経験してこなかった。植民地を本格的に持ったこともないし、逆に征服されたこともない。他民族との交流はさまざまな良い刺激を自国の生活にもたらすが、反面で大きな緊張を強い、猜疑心や憎悪をかきたてる。日本人が温和なのはこのような経験があまりなかったからである。もとよ

り、日本にもよく戦争（内戦）はあった。戦争はいつの時代でも残酷・悲惨なものであるが、しかし、戦争を含めて対立や闘争に民族・人種や宗教の違いが絡むと、残虐さの度合い・怨恨の深さが桁違いになる。日本人はそのような極度に血なまぐさい人種戦争・宗教戦争を幸いにもほとんど経験してこなかった。

③三つ目を挙げるとすれば、日本人が農耕民族であったことである。農耕民族は共同耕作や灌漑のような集団事業を必要とし、また菜食民でもあるから、おだやかな協調的な性格を持つ。これに対し、厳しい風土の中でわずかな牧草地や水源を求めて移動する遊牧民族・騎馬民族がより攻撃的な性格を持つことはよく知られている。もちろん第三の農耕という理由は日本だけには限定されないが。

このような三つ、とくに①、②の根本的原因から、津田は日本人を平和でおだやかな民族と考え、これをもっとも深い伝統と見ていたと思う。津田の仕事は日本精神の本質とその変遷を明らかにすることだが、同時にそれを通して日本文明は中国文明の一部ではなく、独自のものであるということを証明しようとする意図を持つ。日本の古代文明は中国の圧倒的影響を受けたが、やがてそこから自立した文明を作り上げたと津田は考える。たとえば政治体制を見ても、律令制は隋・唐の中央集権制の模倣であるが（それですら中国にはない太政官の制度がある）、次の摂関制からすでに律令制の日本的修正・変容が始まり、頼朝以降の幕府制にいたっては中国の制度文物とは何の関係もない日本独自のものである。道徳を例に挙げれば、中国人が孝を強調するのに対し、日本人はとくに子供をいつくしむことを大変うるわしいと考える民族である。気質を取り上げてみても、中国人が残虐で執念深いのに対し、日本人はおだやかで淡泊である（深く考えずにこの世を肯定する）ということを津田はくりかえし述べている。もちろん、気質の違いは中国が日本と違って大陸国家であり、たえず異民族の侵入に苦しみ、しばしば征服王朝の屈辱をなめたことが背景にある。

平和性と国体 津田の『神代史の新しい研究』（大正二年）の第四章「国体に関する思想」や「建国の事情と万世一系思想」（『世界』昭和二年四月）によると日本の万世一系のいわゆる国体も、実はこのおだやかな伝統から生まれた。国体が本源ではなく、平和性が本源なのである。たとえば、大和朝廷による日本の統一に際し、朝廷も服属した国々も同一民族であるから、建国の過程やその後の統治において激しい反抗や抑圧がなかった。そして、戦争とくに異民族との戦争という事態も起こらなかったから、敗戦による王朝の交代も征服王朝の出現もなかった。古代政権のもっとも重要な任務である大規模な武力行使がないために、天皇は重臣に政治を委ねることができ、責任を問われることもなくなっていった。このような古代日本の平和的環境が朝廷が連綿と続く契機・原因となったのである。そして、いったん朝廷が続き始めると、今度は長く続けるべきものであるという観念が生じてくると言う。国体が本質的というより、平和な歴史こそが本源的なものであり、そこから国体は派生したことを津田はまことに明快に説明している¹⁷⁾。

付論：丸山と津田方法論などに触れて 丸山は例の「自然」と「作為」（あるいは「原型」と「変容」）という概念枠組みを一誤解を恐れずに言うと言先に設定し、その妥当性を日本思想史の中

で検証しようとするスタイルを持つ。けれども、このような概念構成はもともとギリシャ哲学のピュシス（*physis*、自然）とノモス（*nomos*、人為）以来、西欧政治哲学の所産である。それをこのような概念構成に慣れていない日本人のことに精神史の研究に持ち込むことにはもとより意味があるが、しかし、一方当然多少の無理があり、また、西洋的な、俗に言うバタクさい印象を与えることがある。丸山が西欧崇拝的だと言われるのは価値観のみならず、こういう方法論も影響している。

ところが、津田はこのような方法論を取らなかった。彼の文章はきわめて明快であり、かつ論理的であるが、その言葉はまことに平明であり、聞きなれないあるいは難解な概念はほとんどまったく使用されていない。これほど分かりやすい言葉を使いながらこのような高度な研究ができるのかということに感嘆するほどである。津田は中国的なあるいは西洋的な概念によってもとともそういう風土を持たなかった日本人の精神史の研究をゆがめてしまうことを強く警戒していたのである。中国やインドや西洋の概念をありがたがり、概念崇拝に陥ったりすることは古来より日本の学者によく見られるが、津田はそのような概念のフェティシズムからもっとも遠い学者であった。彼は日本人の精神の本質と変遷を明らかにしようという明確な目的を持ちながら、しかし、概念枠組みを先行させるのではなく、膨大な作品を時間的に並べてたんねんに検討していくという時間的・歴史的な手法をとった。まことに無理のない、すなおな方法論である。津田によれば、日本人の精神も歴史的に幾多の変遷を経てきた。たとえば国民の天皇に対する敬愛は常に変わらないとしても、その敬愛の内容は時代によって異なるはずである¹⁸⁾。こういう時代による日本人の精神の変化に十分に注意しながら、彼は無理のない方法で日本人の精神の変遷と本質を描き出そうとしたのである。

また、丸山は概念枠組みを通して、思想を構造的に分析し、ただちに評価はしないが、枠組みを通して自己の価値観なり主張を述べるという方法を取る。「自然」から「作為」へというフレームワークは明らかに「作為」をよしとする価値判断を示しているのである。日本の「原型」と外来の「普遍主義」の場合も、「原型」は明らかに一種の病理で、「普遍主義」が望ましく、また、「原型」によって引き起こされる「普遍主義」からの「偏差・変容」も基本的に好ましからざるものがある。このように作品との距離間を保ち、知的禁欲を守りながら、概念枠組みを通して間接的に、しかし、明快に自己の価値判断を指し示す。

ところが、津田の場合は、厳しい論証精神に貫かれ、考証と評価が当然はっきりと区別されながら、しかも一体となっていることが多い。個々の作品の分析を通して自己の主張が力強く展開され、すぐれた実証的研究でありながら、主義主張を述べた自身の思想の書、哲学の書ともなっている（自己の主義主張からしばしば容赦ない作品批判がなされるため、時に内在的理解に欠けるなどと批判される）。研究と評価とが明確に区別されながらも緊密に結びついているのである。津田の書いたものが、時代とともに一見変化しているように見えるのは、このこととも関係があるろう。つまり、丸山以上に研究と評価が密接に結びつき、随所に主義主張がはっきりと出てくるスタイルを持つからである。それに対して概念枠組による構造分析を通して主義主張を（かなり明瞭にであるが）暗示するにとどめる丸山は、その枠組みを変えない限り、主義主張は変わらない

いことになる。

けれども、津田が戦後変わったと言うのは、まったく表面的な見方であるし、誤解である。家永など多くの学者が津田は戦後保守化したと述べており¹⁹⁾、丸山も新装版『日本政治思想史研究』（昭和五八年初版）の後に付された「英語版への著者の序言」の注記で、津田の戦後版『文学に現れたる国民思想の研究』はタイトルから「我が」の文字が削られるとともに内容が保守化したと書いている²⁰⁾。また、あとで丸山はそれを多少修正して、あれが本質であったのですねと語っている²¹⁾。ようするに戦後の津田については保守化したか、もともと保守的な思想者だったのだという低い評価で一致しているのである。

しかし、これらの見解や評価は全然見当違いである。むしろ、津田の思想はみごとに貫き通したという点で日本の思想者としては稀有なほどである。津田は戦前は軍国主義や国体思想に対し立憲制や学問の自由を擁護する立場を取り、右翼の攻撃と国家の弾圧を受けた。戦後は権利自由や民主主義の行き過ぎ、そして、とくにマルクス主義・社会主義を厳しく批判して—これは戦前からの持論でもあるが—、今度は進歩主義者や左翼の不興を買った。これは、津田が強靱な一貫性を持ちつつ、しかも、時代状況に応じて、何を主張すべきかをきわめて主体的に選択判断することのできるすぐれた保守主義者あることを、逆説的にではあるが、じつに雄弁に物語っている。ちょうど陸羯南が欧化主義の時代に抗して保守主義を説き、次に日清戦争後の国力を無視した軍備拡張に対しては逆に立憲制や国民の権利自由を守ろうとした態度とよく似ている²²⁾。そして、津田のこのような判断と見通しが正しかったことは今日では歴史があざやかに証明している。津田は主義主張の一貫性・論理性、また、日本の伝統への深い知識と的確な評価、そして未来へのすぐれた洞察力、少なくともこの三点においては羯南にまさる保守主義者であろう²³⁾。

注

- 1) 『津田左右吉全集』別巻第二，第一編第一章，たとえば五七～八頁。使用全集などについては注3)を参照。
- 2) 津田左右吉『文学に現はれたる我が国民思想の研究 貴族文学の時代』（大正五年）の自身の序，「偶言」（大正三年，『津田左右吉全集』第二二巻）の冒頭などを参照。津田は「尊皇愛国の思想は今も昔も全く同じもの」だとか，「凝固した国民性」というようなものがある，また，なければならないという考え方を厳しく批判している。
- 3) 津田左右吉『文学に現はれたる我が国民思想の研究』四巻（大正五～一〇年，洛陽堂）。四巻の構成は順に『貴族文学の時代』『武士文学の時代』『平民文学の時代 上』『平民文学の時代 中』で，『津田左右吉全集』全三三巻（昭和三八～四一年，岩波書店）にそれぞれ別巻第二～五として，戦後の改訂版（昭和二六～三〇年）はタイトルの「我が」の文字を取り，それぞれ第四～七巻に配置，引用はこれらによる。なお，第五巻にあたる『平民文学の時代 下』も未完のまま，原稿で残された部分も含めて同全集第八巻に収録。
- 4) 前掲『津田左右吉全集』別巻第二，三三頁。
- 5) 同別巻第一『神代史の新しい研究』（同巻は『古事記及び日本書紀の新研究』も収録），第四章二，一三六～七頁。
- 6) 同別巻第二，三二七～三一頁，同第四巻，四四七～五二頁。

- 7) 同別巻第四, 二六三, 三九六～七, 四一二～三頁, 同第六巻, 二六一～二, 四〇九～一〇, 四二五～六頁。
- 8) 同別巻第二, 三三頁, 同第四巻二三頁。それぞれ「安易な生活をするものの常として, (中略) 従って強い意志が無く,」, 「生活が容易であつたことは, (中略) 新しい事物を造り出そうとする強い欲求が民衆みづからの間に生ずることを妨げた気味がある。」とある。
- 9) 桑原武夫「解説」, 同編『歴史の思想 (現代日本思想大系 27)』(昭和四〇年, 筑摩書房), 二三～四頁。これは, 家永三郎『津田左右吉の思想史的研究』(昭和四七年, 岩波書店), 一〇五～六頁に紹介されている。ただ, 家永は桑原のような見解を全面的には認めていないし, 桑原もやや手厳しすぎたと思ったのか, 津田は小林一茶のような素朴な自然主義の伝統を深く愛していたと付け加えているが。前掲家永書, 一〇六～一一一頁。前掲桑原編書, 二七頁。
- 10) 津田はこの点を自分自身でも少し意識していたようで, これは中国思想史における孔子についての場合であるが, 現代の学者にしてはじめて考えられることを昔の人間に求めるのはもとをより無理であるがと断りつつ, しかし, 昔の人は昔の人なりにそれができなくてはならぬと言っている。『論語と孔子の思想』(昭和二一年), 第五編第一章四末尾参照。前掲『津田左右吉全集』第一四巻。
- 11) 前掲『津田左右吉全集』別巻第二序説第一章, 同第四巻, 序説第一章。また, 『神代史の新しい研究』第四章一, および二末尾, 第五章一の冒頭, 『古事記及び日本書紀の新研究』の「結論」後半など参照, いずれも同別巻第一。
- 12) 津田は縄文人の社会や弥生人との接触混交について直接的には触れていないが, 縄文人の生活が平和であったことについては, たとえば安田喜憲『縄文文明の環境 (歴史文化ライブラリー 24)』(平成九年, 吉川弘文館), 一六一～七〇頁参照。松本武彦『人はなぜ戦うのかー考古学からみた戦争ー』(平成一三年, 講談社選書メチエ) も人は本能によって戦うのではない, 縄文時代を見よ, そこでは戦争に関する意識や思想がほとんど空白だったではないかと述べている。同書, 二四六～七頁。縄文人と弥生人の接触混交も比較的平和裡に行われたというのが, 現在の学説の主流である。たとえば「縄文VS弥生一出会いの風景」上・中・下(『読売新聞』, 平成一七年八月九～一一日) が最近の学説の傾向を簡単に紹介している。前掲安田書もほぼそのように述べている。同書, 二〇〇～三頁。
- 13) 前掲『津田左右吉全集』別巻第二, 三三～四頁, 同第四巻, 一四～五頁。
- 14) 同別巻第二, 三四頁, 同第四巻, 一五頁。
- 15) 同第四巻, 一五頁。
- 16) 同, 同頁。
- 17) 『神代史の新しい研究』の第四章「神代史に現はれている上代思想」の一「国体に関する思想」, 同第二巻, とくに『日本上代史の研究』付録「日本の国家形成の過程と皇室の恒久性に関する思想の由来」, 同第三巻。後者は「建国の事情と万世一系の思想」として『世界』(昭和二一年四月) に掲載されたもの。
- 18) 前掲『津田左右吉全集』別巻第二, 「序」参照。これは同第四巻にも「旧版序」として掲げてある。
- 19) 前掲家永書, 第六編参照。とくにその第二章で家永は津田の主要な著書についてその「保守化」をたんねんに比較対照している。
- 20) 丸山真男『日本政治思想史研究 (新装版)』(昭和六二 (新装版初版は同五八) 年, 東京大学出版会), 三九〇頁。
- 21) 松沢弘陽・植手通有『丸山真男 回顧談 (上)』(平成一八年, 岩波書店), 二二四～五頁。そこでは丸山は皇室や唯物史観の問題を取り上げ, 津田が戦前も戦後も連続していたことがよくわかった, その点をもっとラディカルと思っていた私や家永や羽仁が見損なったのであると語っている。これは津田の一貫性を認めているが, その代わり案外に保守的であったことをけなしているのである。
- 22) 植手通有「陸羯南一ナショナリズムと言論人」, 朝日ジャーナル編『新版 日本の思想家 上 (朝日選

書 44)』(昭和五〇年、朝日新聞社)、二〇二頁参照。また、陸羯南『近時政論考』(昭和四七年、岩波文庫)に所収の同じく植手「史論としての『近時政論考』」のとくに末尾参照。

- 23) 羯南が日露関係の緊迫とともに大きくその外交論を変節させたこと(植手通有「解説」、同編『陸羯南集(近代日本思想大系 4)』(昭和六二年、筑摩書房)、五〇九～一二頁、有山輝夫『陸羯南』(平成一九年、吉川弘文館)、二一五～二三、二二八～九頁)、また、日本の伝統の本質を国体論と考えていたこと、この二点において津田に劣るということである。津田はもっと一貫しているし、日本の伝統を国体論中心で解釈はしていない。そして、羯南が結局日露戦争を支持してしまったのに対し、津田は戦前は軍国主義を深く憂慮し、戦後は民主主義の行き過ぎや行き違えを戒め、そして、戦前戦後を通して社会主義や唯物史観の不当性を鋭く批判した。津田の予見・批判が見事に当たったこと、日本の国家の進むべき道をよく見通していたことはその後の歴史がはっきりと証明している。津田は歴史に対する洞察力でも羯南を上回ると言ってよい。

四 伝統的ナショナリズムはどのような形を取るか

日本文明は受容・深化(追いつき追い越せ)型か 日本文明は一般に受容・修正、時に発展型と見られて来た。これはかつての中国文明やインド文明については必ずしも正しくはないであろうが、とくに近代西洋文明に対してはかなりあてはまる。もちろんこの場合も、日本の伝統をそれなりに活用してはいる。たとえば、ものづくりでは、伝統的な繊細さ・器用さを生かして欧米を凌駕した部分すらある。また、平等は概念としてはやはり西洋原産であるが、日本人は安定して平等型の国家社会を作ることが時に欧米人以上にうまい。これは単一民族で調和・横並びが好きという日本人の伝統をやはりよく生かしているのである。このように日本人は西欧文明に対してそれを模倣しつつ、ある部分でそれを追い越していった。その場合に、かなりたくみに日本人の伝統の一部を生かしているのである。したがって、日本人の外来文明への対処の仕方は単純な模倣ではなく、模倣と深化とその場合における伝統の再活性化を含んでいる。

しかし、深化と伝統の再活性化を含むとはいえ、とくに幕末以降の近代化が追いつき追い越せ型と見られてきたのは間違いない。追いつき追い越せ型はこれで大いなる意味があるが、日本人が普遍的な文明に貢献するにはこれしかないのであろうか。欧米にも中国にもインドにも中近東にもない独自の風土と歴史から普遍的原理を育てあげていくことはわれわれには不可能であろうか。丸山はその可能性を想定していなかった。

津田の再解釈と平和主義としての保守主義 ところが、津田の業績は明らかに違う方向性をも示唆している。日本文明はすぐれた独自性を持つ。それは政治・道徳・文化・言語・芸術などの様々な分野に様々な形で現れてくるが、とくに特徴的なのはその風土性および民族生活から生ずる温和性である。日本人が抒情文学に強いのも大状況が平和だったからであろう。異民族との戦争が頻発していれば逆に古代から優れた叙事詩が作られたはずである。また、物づくりや細部に對するこだわりで秀でているのも、平和であったがために、グランドデザインや構想力・戦略にそれほどエネルギーを使わなくてすんだためであろう。

丸山は日本人の意志の弱さを責めるが、裏返して言えば、意志が弱いからこそ平和でおだやか

なのである。もちろん、このような気質にはさまざまな弱点が伴う。状況にひきずられたり、あいまいにことを済ませる、ごまかすという悪い癖がそうである。しかし、それは理念や意志の強さが一方でさまざまな問題を引き起こすのと同じである。すぐれた文明や原理や宗教は常に恐るべき背徳性や虚偽性を内包する（中国の天理仁義の虚偽性、ユダヤ教・キリスト教・イスラム教を問わず、神の名の下における破壊と殺戮、西洋近代文明の名の下に引き起こされた搾取・戦争・侵略・奴隷制度、社会主義の名の下における弾圧・虐殺と腐敗など）。長所は同時に弱点であるならば、弱点は同時に長所である。弱点の弱点たるゆえんを鋭く自覚しながら、弱点を普遍的原理に育てあげていくことが不可能とは言えまい。

日本には規範的原理がないと言われ、たしかに形而上学的原理についてはあてはまる。しかし、津田を解釈するなら、歴史経験的な原理の可能性としてはかならずしもそうではない。日本人はこういうおだやかさ、平和性、温和性を長きにわたって少なくとも生活や感性のレベルでは原理として持っていた。太古の縄文時代の平和、あるいはそれはしばらく置くとしても、古代が比較的平和であったこと、建国の過程も諸外国ほど戦争や征服一辺倒ではなく、話し合い・妥協があったと考えられること、他民族の侵攻を受けることや人種・民族・宗教宗派に絡む極端に血塗られた絶滅戦争のような経験がほとんどなかったこと。そして、平安時代初期の平和、江戸時代における二五〇年にわたる平和、戦後の社会がその平和性、安定性、調和性において世界にほとんど比類がないこと、それらはこういう無意識の原理が機能したからだと言ってもよい。平和からもっとも遠かったのは武士であり、武士の時代であるが、その武士によってさえ最後には世界に類例のない泰平の世が築かれたのである。もとより、日本人は概念化するという作業が苦手なうえに、伝統の内容自体が温和性、おだやかさであることもあって、それは自覚的な原理に高められることも、それに基づいて意識的に国家社会が導かれることもなかったが、それは規範の可能性・潜在性を持ったものが日本の伝統の中にないということにはならない。我々は神や自然法や天理のような先験的原理を作り出せなかったことは事実であるが、歴史経験的な規範を構築することは十分に可能性である。

保守主義者・国粹主義者はこの日本人のおだやかさ、平和な気質にもっと着目すべきだった。これによって始めて、(一) 伝統性、(二) 普遍性という保守主義の成立条件を満たすことが可能になる。なぜならば、この精神は気候がおだやかであり、民族の興亡をあまり経験しなかったという世界に比類のない伝統から生じている。まさしく、日本独自のものである。しかも、これは他の伝統とは違って、空間的・時間的・社会的に圧倒的である。太古からほとんどすべての日本人はこの伝統の中で生活してきた。これに比べれば、時間的にも、社会階層的にも限定される武士道などものの数にもならない。また、この伝統は、平和主義にはもちろん、平等や弱者への配慮や社会福祉のような普遍的原理に展開しやすい。武士道や国体精神よりはるかに普遍化への可能性を持っている。

そして、近代欧米文明の当時の最大の暗部は戦争や植民地支配であるが、この日本の伝統にはそれを批判し乗り越えていく希望を託すこともできる。最初に設定した(三) 近代欧米文明の全面的ではないにしろ部分的な批判・克服という条件をも満たす。さらに、縄文時代の平和、とく

にその時代の環境との平和（調和）まで含めれば、エコロジカルにも展開しうる。平和主義こそ日本の風土や民族生活から生まれ、未来に展開されるべき保守主義であり日本主義なのである（日本的な伝統として「和」はよく言われてきたではないかという意見があるかもしれないが、この種の議論は「和」が本当に我が国の決定的な本質かどうかという歴史地理的な深い体系的な論証や、「和」の長所と欠陥を構造的に分析しながらそれを自覚的な規範に高めていこうとする方法的反省を欠いていたところに決定的問題がある—この点はもう一度後述する）。

五 結語—自然と作為、内発と外来、そして自大と自虐の和解—

(1) 自然と作為、内発と外来の和解

民族の興亡がなく、おだやかで温和な歴史風土と生活に根ざした伝統から規範を作り上げることの重要な意義のひとつは、「作為」型規範とはまた違ったある種の自然的な原理を可能にするところにある。これは日本人の規範意識を多様に豊かにするであろうし、「作為」型原理の欠点を補ってもくれよう。

丸山のいわゆる「自然」から「作為」へという図式は必然的に作為型原理もしくは作為的態度の採用を志向するものである（この点については前述の三の付論も参照）。このタイプの原理は荻生徂徠の「礼楽」、そしてとりわけ福沢諭吉の「文明」であった。「文明」とくに「近代文明」は知識人と大衆によって意識的無意識的に作り出され、大きな時代の気風となっていく。この原理がいわゆる「自然法」もしくは「天理」と決定的に違うのは、宇宙自然が与えたものでもないし、人間の自然性に最初から宿るものでもなく、作り・作られたというその作為性（主体性）にある。もちろん、福沢の近代「文明」は主体的に作られたものではあるが、一方で多くの人々の無意識の気風・風俗となって定着・継承されつつ変化発展していくところに一種の自然性が混在してくる。宇宙自然でもないし人間の自然性でもないが、長い時間の中で生成し作られていくという意味での歴史的な自然性を持っているのである。したがって、単純な「作為」型原理ではないが、自然法や天理が所与のものであるのに対し、知識人と多くの国民によって作り作られたというところに大きな特徴がある。したがって、彼にとって文明との関係で重要な理性の機能は認識能力というよりはむしろ構想（想像）能力である。原理が最初から宇宙自然や人間性に存在するなら、人間はそれを認識するだけでよいのであるが、これから作っていくということになれば、構想能力が重要になってくる。文明はまさしく、人間の主体的な産物である。

しかし、この主体型原理には大きな弱点がある。それはしょせん人が作ったものにすぎないということにある。もちろん、近代文明は多くの人々の努力と長い年月が作り上げたものだが、しかし、それにしても、神が与えた、天地自然が定めた原理に比べれば、まことに不完全であり、誤りの多いものである。人々が近代文明をより完全なものにするために今後またゆめぬ努力を積み重ねるにしても、完全な文明は無限の彼方にある。福沢における理想の放棄は思想原理的には作為型文明のこの弱点から出てきている。もちろん彼の変化はより直接的には当時の世界や東アジアの情勢が原因ではあるが、規範の構造から見ると作為型原理の不完全性を力の論理に加担す

る理由としているのである（これらの点については拙著『中村敬宇研究—明治啓蒙思想と理想主義—』（平成二年、早稲田大学出版部）第一章二参照）。

このように、作為型「規範」は高い主体性を持つが、同時に人為の不完全性という大きな弱点を抱え込むことになる。そしてその弱点がしょせん理想は無意味であるという力の論理に格好の口実を与えてしまう（丸山自身も徂徠の「人作説」が彼自身の意図と離れて、法制度の恣意的な改変に道を開くものであること、人間の作ったものは人間の破壊しうるものであるという論理に帰結することを認めている。『日本政治思想史研究』第二章第四節2末尾、第五節1、『丸山真男講義録〔第一冊〕日本政治思想史一九四八』第七章第四節参照）。

しかし、二千数百年の長きにわたる、縄文時代の平和を含めるとゆうに一万年を超える伝統から規範を作り出す場合は簡単にそうはならない。日本の本格的な近代文明の受容を開国からとして数えれば百六十年少しに過ぎないが、日本人のおだやかさの伝統ははるかに長く、しかも外から来たものではなく内に存在するものである。天地、宇宙の与えたものではないにしても、われわれの体質に染み付いたものという意味で自然的である。このことは原理の安定性に多大の貢献をする。そして、我々はこの伝統的体質に基づいて、無意識であったとしても、なんとなく平和で安定した政治社会を作ってきたという歴史的経験を持っている。

第二の自然とも言うべきはるか昔からの我々の体質や経験から原理を導き出すことは、もちろん意志的な自覚努力を必要とするにしても、新たに理念を構想したり、導入したりする場合にしばしばありがちな摩擦や混乱や争い（宗教的原理の導入の場合とくに著しい）、そして苦しみをを大いに軽減してくれる。丸山は日本人が普遍的原理を確立しようとするなら非常な「飛躍」「回心」を必要とすると言っているが（『日本の近代化と土着』（昭和四三年））、その努力・苦難を大いに減じてくれる。これが伝統の強みである。我々は超越的な神とか宇宙内在的な自然法・自然権とか、はたまた天理・道やダルマ・仏というような先験的・形而上学的原理を打ち立てることはできなかったが、長く深い伝統に立脚した歴史経験的な原理を構築することは十分可能である。

日本の保守主義、日本の規範の可能性は十分にあると考えるが、その場合、次のような点に反省留意する必要がある。

①まず、伝統を規範化するためには、歴史性・自然性になんとか安住するだけでは不十分で、意識化・自覚化するという作業が必要になるし、これを守り抜く—どうしても避けられない場合は、武器を取ってでもということもあるかもしれない—決意や覚悟が求められる。日本人は概念化し、そして、意志的に実行するということが苦手であるが、しかし、この点を克服しなければ、平和主義も自然的習慣の範囲にとどまって、規範化されえない。そして、概念化するという作業を抜きにしまうと、日本人の平和主義をたえず反省し深めることもできなくなるのである（なお、伝統主義の側から日本的和の素晴らしさということは言われなかったわけではないが、こういう議論はたとえば和がどういう民族的背景や風土的起源を持つのかという深い歴史文明的考察を欠いているため、なぜ和が日本の本質的な伝統なのかについて説得力のある論証がなされなかったり、また、和の構造的な長所と欠陥をよく理解し、それを意識的な規範にまで高め

ていこうとする方法的反省が見られない点で致命的欠点を有する)。

このように従来日本の保守主義者は概念性や論理性、論証性に乏しく、また深い洞察や意識的な方法的反省に弱く、それらを無視したり、居直ってしまうようなところ多々あった。逆に、進歩陣営とくに左翼の人々は外来の概念をむやみに有難がり、その権威を振り回すような悪い癖があった。そして、後者も結局は本当のところ実証的でも論理的でもないことが多い。概念の権威や観念の図式にすぎない左翼と、論理や実証を無視する保守主義者は実は表裏一体で、論理に弱い日本人の病理をよく示しているのである(この日本人の思考の弱さを鋭く自覚し、概念崇拝を極力排除しつつ、しかも徹底的に論証性・論理性を尊ぶ保守主義者津田左右吉はこの点でも稀有の存在である)。日本人とくに保守主義者は概念崇拝を排しつつ、しかも、実証的・論理的そして真の意味で概念的に考える習慣を身につける必要がある。そうすることではじめて無意識の伝統を規範的理念にまで高めることができる。

② ①と連関するが、平和性は平等・博愛・福祉といった徳目や原理とは比較的結びつきやすいが、自由・勇気・正義・決断力・主体性というような美德が不足しがちであることによく留意しておかねばならない。どのような規範にも必ず長所と弱点はあるものであるが、平和性の場合も、こういう短所があることをよく自覚し、それを克服する努力を行わないと、平和性そのものが成り立たなくなってしまう。たとえば、過度な勇気や無謀な決断力は平和を破壊してしまうが、しかし、勇気なしには平和も守れないことも事実である。正義のない平和や秩序もありうるが、そういう秩序の下で人生を充実させることができるであろうか。

③ また、現代においてはさまざまな形で日本の平和の伝統を世界に向かって自覚的に広げていこうとする努力もきわめて重要である。戦後の日本はこういう国際平和への貢献をある程度してきた。先の大戦を深く反省し、平和憲法を作り、非核三原則を守り、防衛費を抑え、国連を尊重してきた。これまで武力紛争を起こすこともなく、海外で戦ったこともない。武器も輸出しなかった。発展途上国に対しては、一切軍事的支援をせず、経済的・技術的な援助に力を入れてきた。そうした努力をいっそう高める必要がある。とくに、これまでのように平和の維持に参加協力するだけでなく、主体的に平和な秩序を構想することが求められよう。とりわけ鋭い国際的緊張の続く東アジアでは平和への一日本人が苦手な一構想力・リーダーシップが問われてくる。概念化に弱い日本人は構想力も劣るが、そう言って済ますわけにはいくまい。

なお、日本人の比較的すなお、おだやかな、人の良い性格は、ともすると物事を表面的に単純に考えて済ます傾向があり、複雑で立体的また重疊的な思考に弱いことにも深く留意せねばなるまい。このような性格はとくに厳しい国際社会で生きていこうとする場合に大きな弱点になる。日本は戦後も外交べたで、他国の意向を計りかねたりそれに振り回されたところがあるが、それは日本人が複雑で立体的な、いわゆる「したたかな」戦術や駆け引きが苦手だからである。戦後の日本には一時徹底した平和主義が横行したが、国際関係を単純に割り切っている点では、戦争賛美と同様に、単純な平和主義も間違っている。民族の興亡を経験しなかった日本人には難しいことではあるが、しかし、その平和主義を世界に推し進めようとするなら、複雑で立体的なものの見方や、タフで抜け目のない手腕や対応が必要である。平和を欲するなら防備を固め

よというのは残念なパラドックスではあるが、これを認めることもよき意味での狡知であろう。

④そして、新しい時代の平和として、たんに国家のあるいは国際間の平和だけでなく、自然との平和、自然との共存共栄を考えるとよい。これは伝統に新しい解釈や新たな息吹を与えることになる。縄文時代の平和はまた同時にきわめてエコロジカルであったと言われるから、日本の伝統をこの意味で拡大再解釈することには無理がない。

自覚的に平和を国際社会に広げることも、自然との共存に再解釈することも、伝統を意識化する契機になる。こういう一連の作業によって伝統の自然性に意識性・作為性が結びつく。このような自覚化・意識化のプロセスをとおして自然性を基本にしながらもそこに主体性が結びついた規範が出来上がる。

丸山・植手氏のような考え方では、日本に普遍的な原理はなかったから、近代文明をいったんは我がものとし、やがてそれを追い越していくという原理の作り方しかなかった。この方法が普遍性に貢献する立派なやり方であることは十分に認める。しかし、近代・現代文明の不完全性が常にそれを否定する口実になり、また、今日でもしばしば内外の民族主義者に見られるように、近代・現代文明の外来性が反発を呼ぶのである。もとより、西洋文明をいったんは模倣しつつ、深め、広げ、豊かにするという作業を我々は今後も必ず継続しなければならない。西洋文明はそれだけの値打ちを持つ。しかし、同時に自然的で内発的な規範の作り方があるのなら、それは作為的で外来型の規範の欠点を補ってくれるだろうし、なによりもわれわれは豊かで多様な原理を持つことができる。この時、近現代文明を深化させようとした結果と、伝統の側から近代文明を補正し高めた成果とがその内容において一致するということが十分にありうる。それが目指す普遍性・世界性の本質というものであろう。

(2) 自大と自虐の和解

伝統的ナショナリストは、日本の温和な風土自然、激しい民族の興亡がなかったというおだやかな生活に着目して新たな平和主義を構想すべきである、こうすることによってのみ日本の風土と歴史に根ざし、なおかつ普遍妥当性の高い内容を持つ日本主義・保守主義が生まれて来るという主張をすると、たとえば丸山政治学を支持する人々からは次のような二つの反論がなされるであろう。①日本人の閉鎖志向・共同体志向と②一五年戦争の問題で、とりわけ重要なのは②と思われるが、まず、①から見てみよう。

①ひとつは、日本人の平和意識はしょせん内向きを志向するのではないかという反論である。丸山によれば、日本人の精神的原型には普遍的な価値よりも特定の共同体（氏族や国家）の利害を優先する意識が強固に残存している。したがって、倫理徳目も特定の集団にかかわるものを好み、忠孝や愛国心でまとまることはあるが、世界人類という広がりがない。日本人の平和意識がとかく内向きで一国平和主義などと揶揄されるのもこういう意識と関連があろう。

しかし、平和は愛国心や忠孝とは違って、必ずしも特定の集団や人間関係を前提にしなければ成立しない徳目ではない。儒教の徳目になぞらえると、忠孝は狭い人倫関係それも上下の関係を

越えられないが、仁義は普遍的な性格を強く持つのも同じで、平和それ自体の性格からして世界に開かれ、特定の集団を超えていく可能性を持っている。だから、たとえ内向きな一国平和を考えるにしても、それはおのずと他国に対する平和・友好的な態度を必要とする。最低でも、かわりあわないこと（江戸期ならば鎖国）が必要となる。これは、愛国心や勇気あるいは忠孝が一定の民族や国家や家の内では有徳であるが、他から見れば悪徳そのものになるケースが多いのはかなり違っている。内に対する平和が外に対する平和に比較的つながりやすい。国内では一応平和を保ちつつ、外で戦争をするということも考えられなくはないが、とくに国際化の進んだ現代においては、国内の平和すら保てない危険性が高い（過去においても外戦の失敗から体制の混乱破綻や変更を招いた例は多い）。

日本は戦後かりに一国平和しか考えていなかったとしても、国際紛争の武力介入には絶対に手を出さなかった。これを酷評して、他国の紛争に無関心を決め込み、放置してきたとも言えようが、介入すれば、紛争がさらに激化し、複雑になることはいくらでもある。日本の平和主義はやや内向きであったろうが、国連の尊重・国力に比較しての軽武装と非核・海外での武力の不行使・武器の輸出禁止・経済援助主体というやりかたで世界の平和にある程度貢献してきたと言ってよい。内向きで下手に外に手を出さなかったから日本にとっても他国にとってもよかったという側面がある。そうして見ると、平和主義は消極的な場合ですら、他国に対する平和的・非戦的態度を生むのである。その意味で、もともと普遍的に広がる要素を含んでいると見ることができよう。もちろん、日本人は今後消極的に平和を唱えるだけでなく、積極的に平和を構想する主体性を持つ必要があることは言うまでもないが。

②もうひとつの反論は日本人の平和性・おだやかさは一方で言うとも意志の弱さであり、状況に流されやすい主体性の欠如である、このような意志の弱さこそが世界状況に引きずられるような形であの一五年戦争の悲劇を引き起こしたのではないかと。もとより、日本人のおだやかさは一方で言えば、意志性の弱さである。丸山はこのような意志の弱さが、状況に追従し引きずられていくような日本型のファシズムの原因になったことを、ドイツのファシズムの能動的ニヒリズムと対比し、「超国家主義の論理と心理」（昭和二年）以下の論文の中で、見事な論理構造的、心理的分析を加えたことは周知のとおりである。

しかし、人でも、民族でも、大きな欠点は常にすぐれた長所である。長所と欠点は表裏一体である。そもそも、ナチズムの悪魔的理念はヨーロッパ人の強烈的な神観念と意志性を裏返したものとも言えるのだから、強い原理性には一步間違えるとこのような問題が生ずるし、逆に原理性・意志性が弱いことも、見方を変えれば協調性・平和性という大きな長所になりうる。丸山は特に日本精神をトータルに評価する場合、この誰でもが日常的に良く知っているまことに平凡な、しかし、深い真理に気づかなかったか、うっかり見落としたように見える。よく丸山は病理だけを抉り出すと評されるが、それは正確ではない。正しく言うと病理がじつはすぐれた個性でもあり、長所ともなりうるという当たり前のことを見落としたのである。それは、太平洋戦争という有史以来の最大の民族的悲劇の渦中から、それを繰り返すまいとして出発した丸山政治学と、明治の末から大正の初めにかけてすでに骨格が形成されていた津田史学との違いであろうか。さらに

言うと、丸山は日本の伝統を嫌悪・批判したが、津田は厳しく批判しながらも深く愛したのである。両者とも日本人の本質について同じ認識に到達していると言ってもよいのだが、津田は日本人の意志の弱さを厳しく戒めながらも、丸山のようにそれを一方的に切って捨てるのではなく、反面でそれをおだやかなやさしさとして評価できたのはそれがためである。

付論：津田は軍国主義をどう批判したか ただし、逆に言うと、津田は日本の軍国主義については本格的な分析や論評をしていない。したがって、日本人のおだやかさ、やさしさがなぜ侵略やそれに伴う残虐性を生むに至ったのかというメカニズムやからくりを明らかにしていないように見えることに一ないものねだりではあろうが—多少不満が残る（もっとも、津田も敗戦を予感しつつ、今度の大战がなぜ起こったのかはよくよく考えて見なければならぬとは言っている。「どうして戦ひが起され、その戦ひにおいてどうしてこんなに負けて来たかは、大きな問題であつて、日本人として、いまのうちに、深く深く、考へねばならぬことであるが、」『津田左右吉全集』第七巻付録の「昭和二〇年一月二日」のメモ）。あれほど日本の伝統について深い理解に達していたのだから、丸山のように伝統と軍国主義の構造的連関性を考察した研究があってもよいように思われる。

けれども、津田は日本の伝統についての多くの誤解を解き、正しく理解し理解させることが軍国主義や超国家主義を否定する道であると考えていたのであろう。たとえば、記紀は一般の神話でも民族の成り立ちを描いた叙事詩でもなく、皇室が我が国を統治する正当性の由来を説いた官僚の作文、高度な政治神話で、また、すべてが歴史的事実というわけではないという主張が誤れる忠君愛国主義の是正という意図を持っていることは言うまでもない。また、日本の伝統の本質は平和であり、その平和こそが国体を可能にしたという考え方は国体論や武力主義・軍国主義に対する鋭い批判であり、日本は古代において中国文明の影響を大きく受けたが、やがて、独自の文明的発展を遂げたという考察は日中の同文同種を謳うアジア主義（超国家主義）の虚偽性に対する鋭い告発になっている。丸山がナショナリズムを変質させた精神的起源に迫ろうとするのに対し、津田は日本の本来の姿を明らかにしようとする方向を選んだ。したがって、津田的に考えれば、日本人はみずからの伝統を正しく理解していないからこそ、軍国主義や超国家主義に走ったことになる。日本の平和な伝統をよく自覚せよ、それが少なくとも無謀な戦争に対する強い抑止力になる、これが軍国主義に対する津田の当面の答えであろう。

そして、①日本の平和主義が一國平和主義のようなとなく内向きの傾向に持っていたこと、また、②それが状況に引きずられるような形であのいまわしい一五年戦争を引き起こしたことは深く反省する必要があるが、しかし、振り返って見ればそもそも深刻な背徳性や重大な虚偽性を持たない文明や原理などがあっただろうか。

たとえば、中国の儒者が口やかましく唱えた仁義・天理はほとんど実現されなかった。儒教は二千年間も官学として権威を持ち、儒者は官僚となったが、その間、中国は混乱し、停滞し続けたではないか。礼教の本場中国の世態風俗が日本より悪いことはすでに江戸の知識人たちが指摘

しているところである。そして、今でも解放と平等を掲げる中国共産党の支配のもとで、まったく逆に専制と利己主義と格差が猖獗を極めていないか。

また、宗教はあの世における魂の救済を目的とする性格もあって、ともすれば現実の悲惨に目を覆ってきただけでなく、それ自身権力化し、あるいは不合理な政治社会体制と癒着し、圧政を支えてきた。そして、その宗教的原理の独善と傲慢―丸山政治学の好む主体性は常にこういう悪徳に陥りやすい―によって、どれほどの虐殺を行ったか（宗教上の人権侵害やテロ・戦闘は今でも頻発している）。

近代に目を転ずれば、西洋文明が偉大なる光明と同時にどれほどの搾取・抑圧と戦争をもたらしたか。欧米人にとっての進歩や豊かさはアジア人やアフリカ人にとってはいったいなんだったのか。ナチズムの強烈な悪魔的理念もヨーロッパ人の峻厳な神観念や意志性の鬼子であるとも言えよう。はたまた、平等とか開放という社会主義の理念が実のところどれほど悲惨で残酷なものであったか。我々の信頼する近代的な原理、たとえば自由は常に弱肉強食あるいは放縦や無秩序に陥る危険性を持ち、権利はエゴイズムや身勝手と紙一重である。平等がしばしば自助努力の放棄、腐敗と無責任の温床になったことも我々は良く知っている。平等の社会主義はその抑圧と腐敗によって崩壊したが、自由の資本主義もまたいくどとなく世界恐慌を引き起こし、各国の経済活動を破壊するにとどまらず、時には世界大戦の大きな背景・誘因ともなった。

すぐれた宗教、あるいは高い理想や主義主張、そして光輝ある文明、そうじて規範的原理と呼ばれるものはまったく似ても似つかぬ悪徳や虚偽と表裏一体であり、そこに転化するあやうさを常に秘めている。この点を鋭く意識し克服しようとするたゆまぬ努力によってかろうじて規範は規範として維持されるものなのである。日本の風土と生活と歴史に由来する我々の気質にも大きな弱点があり、そこから平和という原理を導き出すことにも様々な問題性はあるが、しかし、それはすべての規範にまつわるものである。我々が日本人の民族的な欠点を正しく意識し、努力するならばそれは相当程度克服されよう。また、そういう努力なしにいかなる規範も規範たりえないはずである。長きにわたる民族の生活や経験や感性の中におのずと培われてきた平和の伝統を自覚化・概念化するという作業をとおして、また平和を守りぬく決意をとおして、そして万やむをえざる場合には戦う覚悟や準備をとおして、無意識の伝統を意識的・主体的な規範原理に高めることは十分に可能である。自国の伝統に不当に低い評価を与えるという傾向はそろそろ卒業したい。

誰かが言っていたように思うが、民族や国家であれ、個人であれ、自分を正しく誇れる者のみが、また自分自身の欠点や罪悪について言葉の本来の意味で真摯な反省ができると信ずるからである。